

---

# 麻帆良学園と悪魔使い

紅蓮藍花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

麻帆良学園と悪魔使い

### 【Nコード】

N2156T

### 【作者名】

紅蓮藍花

### 【あらすじ】

麻帆良学園が出来るはるか昔から、デビルサマナー悪魔召喚士達は裏から世界を守り続けてきた。

それは誰にも知られることも無く、誰にも誉められることも無く、自らの信念を持って世界を、そして大切な者たちを守り続けてきた者達である。

それは正義ではなくとも、世界を大切な者を守るためであれば悪魔召喚士達は自らの手を汚すことも厭わない。

一部の権力者しか知らない彼らは、今日もどこかで世界を大切な者

を守り続けている。

## プロローグ？（前書き）

間違って連載小説を短編小説として投稿してしまったり、2・3話書いた物が消えると言つ怪奇現象が発生しました・・・。

明日明後日には次話を投稿できればと思っています。

## プロローグ？

天海市の事件より5年……。

俺は、ヒトミと共にデビルサマナー（悪魔召喚士）としての仕事をしていた。

そんな中、マダム銀子より最優先事項として、ある依頼をこなして欲しいとの話があった。

これから、俺はどんな事件に巻き込まれていくのだろうか？

また、ろくでもない事件に巻き込まれそうな感じはビンビンするんだが……。

まあ、運命と思ってあきらめるしかねえか。世知辛い世の中だよ。

全く、最近は平和でよかったのに……。

悪魔使い世界を知る。(前書き)

うん。以外に書くのが難しい……。

明日明後日には次話投稿できればいいかな?と思います。

## 悪魔使い世界を知る。

あの事件から5年後、俺たちは普通の生活に戻っていた。

あの事件とは天海市でおきた悪魔による事件だ。

俺（神威焰：カミイホムラ）とヒトミ（遠野瞳：トウノヒトミ）そして仲間達が経験した。他の誰かに話をしても誰も信じないようないまでは懐かしいとさえ思えるような小説や漫画の世界のような事件だ。

あの後しばらくしてから俺は、マダム銀子さんの紹介で、デビルサマナーとしての先輩でもあり、頼れる兄貴的な人である、元の体を取り戻した葛葉キョウジさんと出会い、縁があつて葛の葉探偵事務所に雇われている。雇われているといっても臨時職員扱いだが。

なぜなら、事件後何故か引退してしまった。リーダーことスプーキーの代わりに、俺はスプーキーズのリーダーとなり様々な社会不正を暴いてきたが、最近ではサマナーの仕事が忙しかったため疎かになりがちである。そのため、仲間からは色々といわれっぱなしだが・・・まあいずれは語ることにしよう。

話が脱線しかかっているな・・・。

・・・誰に言ってるんだ？俺は？

まあいいや・・・。

事件の後、これからどうしていいか何も分からないでいる俺は、マダム銀子さんにより、詳しい裏の世界の事を聞いた。

葛の葉一族の事、帝都守護役ヤタガラスの事、デビルサマナー（悪

魔召喚士）は一部の例外を除いて必ず何処かの一族に所属しているのだと言う事など様々なことを聞くことが出来た。

俺みたいに例外的にサマナーになるのは稀と言うよりも前例がほとんど無いために様々な一族が俺を狙っているのだと言う。（新しい血を入れるためだとか活性化だとかなんとかか。）

それはダークサマナー達も例外ではないらしい。

そのために、何処かの一族に所属する必要があるらしい。

だから、いやでも何処かに所属しなくては行けないらしいが……。

（めんどくさい……。）

そんなことを考えながらスプーキーズトレーラの中でGUMPを弄っているヒトミが話しかけてきた。

「なにか悩み事？」

「正直気が乗らないなあと思って」

「何が？」

「所属の事だよ」

「ああ。そうよねえ」

「正直めんどくさいのが一番だし、しがらみとかありそうで嫌なんだよね」

「でも、所属しないと不味いんでしょ？色々と？」

「まあな〜、どうすっかな〜」

ピリリリ……。

そんな事をヒトミと話していると葛の葉探偵事務所の所員であり、葛葉キヨウジさんの相棒でもある。レイ・レイホウさんから電話が入った。

「はい神威です。」

「神威くん？いま時間大丈夫？」

「大丈夫ですよー。レイさん何かご用件でも？」

「うん用件と言うよりもアドバイスとか勧誘かな？」

「??？」

「うんとね〜、電話ではちょっとアレだから事務所に来てもらえる？」

「盗聴の心配は無いですよ？スピーキーズ&レティキュリアン特製回線ですから」

「それは信用しているんだけど……。やっぱり会って目を見て話したいのよね」

「分かりました。明日のお昼ごろ来てもらえると助かるわ」

「了解しました。」

くくく翌日くくく

「ありがとうね、わざわざ来てもらっちゃって。」

「いえいえ、レイホウさんにはいつもお世話になっていますから。」

「では、早速本題に入りましょうかね、マダムから葛の葉一族のこととは聞いた？」

「ええ、少しばかりですが、葛葉一族は宗家に他にそれを守護する4つの家系があるんでしたっけ？」

「そうね。概ね合っているかな？でもね。実は、現段階というよりここ最近では、といっても20、30年の間葛葉の頭首っていないのよ。要は宗家というものが無いのに等しいのよ、血筋はまだ途絶えてはいないんだけどね」

「えっ？そうなんですか？」

「ええ、詳しい話は避けるけれども、葛葉一族の頭首の事だけど実はキョウジなんだよね。」

「はあっ！？本当ですか？」

「うんうん、信じたくは無いは分かるけれども、事実なのよ。」

「知つての通り、葛の葉一族はある意味実力者主義でね、本来なら恭二は党首に慣れない傍流の出なんだけど、サマナーの腕は超一流

だから、頭首に祭り上げられちゃったんだよね。」

「そうなんですか……。」

「まっ、本人はそれが気に入らないみたいだけれどね。まっ！  
！そういうことだから余計なしばりはないし、取り敢えず所属して  
みたら？マダム銀子さんより色々とは話は聞いているから余計な仕事  
はさせないし、気に入ったいらぬで仕事を選んでも良いし。」

「うん。実はですね、スプーキーズの仕事が疎かになっていて仲  
間達に色々……。」

「大丈夫よ！最近ではとゆうか。この世の中だから副職とし  
てしているやつらも多いからそれでも良いんじゃない？アルバイト  
感覚みたいなの？」

「身もふたも無い話ですね。」

「まあね。」

「今どきサマナーだけで暮らしていけるのは一部だけよ。あと、  
マダムより聞いたと思うけど魔法使いの世界の事は聞いた？」

「聞きました。正直唾物でしたが実際連れて行かれると信じない  
といけませんね。」

「あはは、そうね私も最初はそうだったわ。で？どうするの？」

「それなんですけど……。もう少し考えたいのでとりあえず、仮所  
属とかでも良いですか？」

「うん。まっそんなところがおとしどころかな？（マダムよりぜつたいに逃がすなと言われてるし）いいわよ、それで決まりね！」

「それでこれからのとんだけど……」

そこから、レイホウさんに俺は何故かヒトミを連れてくるように言われ今後のことを話していった。

## 悪魔使い修行と心を知る（前書き）

早速更新が遅れましたw

一回書いた物を投稿が出来ないというまたまた怪現象が・・・。

文が途中途中おかしいところが多々ありますが、気にしないでください。

書き直すと消えた文章をつなぎ合わせたものなもので、一度清書するかもしれませんがまずはドウゾー見てください。

## 悪魔使い修行と心を知る

俺とヒトミとレイホウさんは葛の葉探偵事務所です。今後のことを話していた。

「ところでレイホウさんなぜヒトミを呼んだんです？」

「うんとね。天海市の事件のときなんだけど……。ねえ？ヒトミちゃん聞いてもいいかな？」

「ええっ……。大丈夫ですよ」

レイホウさんは聞きにくそうにヒトミに聞いてきた。

「率直に聞くわね？あるとき、悪魔を身に宿していたわよね？」

「……。なぜそう思うのです？」

「うーとねえ、蛇の道はなんとやらで……。実はねえ、あたしはも守護天使と言うか降霊者なのよ。その焔君にはわかるよね？」

「ええっ！！？本当なの焔？」

ヒトミはかなり驚いた様子でおれに問いだ出してきた。

「まあ、なんとなくは気がついていましたが……。」

やはりと言うか、レイホウさんも只者ではなかった。あの事件のときレイホウさんと戦ったときの違和感がこれで解けた感じだ。

デビルサマナーでもない不思議な感じがしたのは、そのせいだったか……。

「ヒトミちゃん、話を進めていいかな？私はね降霊者つまりは神降ろしの能力を持っているの……。だからね？ヒトミちゃんあたしと一緒に来て修行をしない？」

いきなり何を言い出すんだ！！！！レイホウさんは！？

もうこれ以上、ヒトミをこちら側に巻き込見たくは無いの！！俺のせいである事件を最後まで突き合わせてしまっただけでも……。

『俺にとっては……。我慢が出来ないことなのに……。』

むしろヒトミも関わりたくは無いと思っているはずだ。

「レイホウさん！！それはだ『わかりました！！どの程度まできるかわかりませんが、よろしくお願いします！！』……。何を言い出すんだ！！！！ヒトミ！！！！」

俺はヒトミが言い出したことが理解できずに喚き散らしてしまった。

「もうお前は、これ以上怖い思いをしなくていいんだ！！普通の生活を送って良いんだ！！俺なんかにつき合う必要なんか無いんだ！！！！」

するとヒトミは目に涙を浮かべながら、小さな声で話し始めた。

「最近、焰辛そうにしてるよ？、最初は私といるのが辛いのかな？

と思ったけど違った。だっていつも焔、私に優しい、あの事件の後妙に優しい、最初はうれしかったけど……。優しいのに辛そうなんだもん……」

そんなヒトミの言葉に俺は何も言えなくなってしまった。

「……」

「あの事件（天海市の事件）のとき最初はね？なんであたしが？とか色々思ったけど、焔と一緒に事件を解決していくうちになんだか馬鹿らしくなってきた」

ヒトミの言葉に俺は戸惑いを隠せなかった。だって馬鹿らしくなくて……。

「なんで？って顔してるけど、だって焔いつでも前しか見てなかった、後ろなんか向いてなかった」

あの事件の時は俺は只前に進むしか道が無いと思ったからで……。ヒトミが思うような事は、俺は……。

「そんな焔を見ていたらなんだか、色々悩んでいる私が情けなくとつか馬鹿らしくなってきたって悩むのやめたの、悩むんだったら前に進んで焔についていこうって思ったから、だからレイホウさんに修行をしない？と言われた時、また私は前に進めるんだと思ってうれしかったんだ」

「はい！！そこまで！！色々あると思うけどそろそろ私を入れてくれないかしら？」

それまで、空気扱いだったレイホウさんがちょっとプリプリしていた。。

「ヒトミちゃん明日から修行を始めるから明日のお昼過ぎに来て頂戴」

「わかりました、よろしくお願いします!!レイホウさん!!」

元気良く返事するヒトミに俺は。。

「・・・まだ納得はいかないけどヒトミが前に進むならもう俺は止めない、昔からお前はそうだったもんな」

「そうよ?今頃わかったの?スプーキーズの時もそうだったじゃない!!」

「そういえば、そうだったな・・・」

そうなのだ、ヒトミは以外に頑固で俺がリーダー(スプーキー)に誘われてチームに入る時も無理やり、リーダーの所へ行きあたしも入れてくださいって頼んでひと悶着あつたんだっけな。。

「そうそう、焰君もキョウジが自ら修行つけるって言ってわよ?」

「えっ、本当ですか?」

「ええ、後で連絡があるはずよ?」

「わかりました」

「それじゃあ、今日のところはここら辺で解散かな？」

「では、また……。」

~~~~~翌日~~~~~

俺とヒトミは葛の葉探偵事務所に来ていた。

そこには、俺が尊敬するサマナーで俺が勝手に思っているだけが、兄貴的な存在でもある。キョウジさんがいた。

「おっ？ 焰！！ 良く来たな！！ 早速修行だ！！！」

「はつつつ？」

いきなり何を言い出すんだ？

確かにレイホウさんからは修行をつけてくれるという話だったけど……。

「レイ、俺たちは暫く連絡が取れなくなるから後処理よろしくな？」

「はいはいわかっているわよ。」

「えつつ？ ちょっと待ってください？」

俺は今だ状況がわからないんだが。

「ヒトミちゃん、焰の事暫く借りるな？ まあ……。1〜2年は借りるからよろしく！！！」

「えっ？はぁ……」

ヒトミも状況がつかめなくてオロオロしている。

「んじゃいくぞ？」

そう言うとキョウジさんは、懐から一枚の札を取り出すとそれを頭上に放った。

その瞬間俺とキョウジさんはいつのまにか、何処とも知れない神社にいた。

「あつあれ？……はぁれ？」

「ぼつさとするな！！いくぞ！！」

キョウジさんは神社の奥へとさっさと歩いて行ってしまった。

「ちょっと！！待ってくださいよ！！ここは何処なんですか？」

「ついてこい。来ればわかる。」

キョウジさんはそう言うとそのまま神社の社殿の中へ入っていった。俺もそれに続き、神社の中へ入ってみると以外にも見た目以上の広さがあった。

その奥には祭壇があり、神秘的な雰囲気をかもし出していた。

キョウジさんはその前に着くとこちらに振り返り真剣な眼で俺に話しかけてきた。

「ここはなあ、葛の葉一族の神社だ、おまえもこれから仮所属といえ葛の葉一族だからな連れてきたかったんだ」

そう言いつたときキョウジさんは優しい目をしていて、俺はそれが少しでも俺は認められたと思いつれしくてたまらなかった。

しかし、それはこの後の修行に入る瞬間に裏切られた。

「ここは、さっき話したとおり葛の葉一族の神社だ、只の神社ではないんだなこれが、ここでは異界開きといわれる技法を行なうことにより、異界へいけることが出来る。」

「異界ですか……。」

俺もあの天海市の事件の時に経験した異界化が、ここでは自らの意思で出来るということか。

「そう異界だ、異界では人はいないのは悪魔だけだそこでお前の修行をつける。異界ではこの時間とは違う時間枠で動いているから、この時間が1時間だとあちらでは12時間が経つ様になっている。」

「はああ、、、そうなんですか？俺が経験した異界化とはずいぶんと違いますね」

「お前が経験したのは偶然引き起こったものだからな。また違うんだよそこら辺もいずれ説明してやる。」

「でもその前に、少しばかり聞きたいことがある。お前は魔法は使えないんだよな？」

「ええそうです。色々と試したんですがやっぱりダメでした。」

「・・・そうか、しかしお前には呪術師であり、葛の葉と同程度の一族の魂を経験してるんだから、魔法は使えても良いはずなんだがな」

「そもそも、俺には魔力はありませんよ？いくらヴァイジョンクエストVQでト部氏を経験したからといって、魔法なんて・・・。」

「お前は、限りなく一般人の家系だが、おまえ自身はデビルサマナーであるから少なからず魔力はあるはずだ、そうでなければGUMPも動かないはずだしな」

「そうなんですか？」

「ああつ、多分な・・・」

「多分つてあんがい、いい加減ですね・・・」

「まあそう言うな」

キョウジさんはそういいながら懐から、一枚の白い紙を取り出した。

「なんですかそれ？」

「これは、魔力の有無と魔力量をはかる、呪術紙だ魔力を込めると色が段々と変わっていき、濃度によってそいつの魔力量がわかる」

そういうとキョウジさんは俺に紙を渡してきた。

俺はそれを受け取りながら、キョウウジさんに聞いてみた。

「魔力を込めるってどうやるんです？」

「お前、気は使えるのか？」

「ええ、多少ですが使えますよ？銀子さんからは天井を知らない量の持ち主だと言われましたが、それが何故良いのか良くわかりませんが・・・」

俺の言葉にキョウウジさんは、驚いた顔をしていた。

「まあ、気が多いことにはいいな、お前みたいな前衛タイプはなおさらだ。少し話が脱線したな、気を集めるみたいに、その紙に集中してみる」

俺は目を閉じ、気を手のひらに集中させた。

「朱色が・・・。濃度もそこそこだな」

キョウウジさんがつぶやいたのを聞き、俺は目を開けての中にある紙を見た。

「あれ？色が変わっている」

「そうだ、その紙は魔力によって色と濃度が変わるんだ。お前の場合には朱色で濃度もそこそこだから、大体常人の5倍程度は魔力があるはずだ」

「本当ですか！！！！！」

俺はその言葉にびっくりしてキョウジさんに詰め寄ってしまった。

その瞬間、ゴスツ！！と言う音と共に目の前に火花が……。

キョウジさんが俺に拳骨を落として落ち着かせたみたいだ。

「落ち着け！！魔力があるだけで使えるかどうかもわからないんだぞ！！！！」

「……すみません、ついうれしくて」

「まあいい、これから修行で使えるかどうかは直ぐにわかるはずだ」

「異界の異界に連れて行くぞ？そこからが前前の修行が本格的に始まる。そしてそこから魔法が使えるようになるかはお前しただいだからな？ある意味裏技みたいなもんだから……」

「異界の異界？」

「まあ、百聞は一見にしかずだ！！では修行へ行つてらっしゃい。俺はその間、久々の休暇を楽しんでくるからがんばれよ？」

そう言った瞬間キョウジさんは祭壇のところにある紐を引っ張った。

俺はそれを見た瞬間、足元に浮遊感が生まれたなあ？と思った瞬間落下していた。

「キョウジさああん？なぜですかあああああ」

「まあ、がんばれよ？修行中死んでも事故扱いだ気をつけるよ？」

キョウジさんはニヤニヤしながらそんなふざけたことをいつていた。

さっきは俺の事を認めてくれたと思ってうれしかったのにいいい。

絶対次ぎあつたら一発殴る！！ぜってえ殴るかなあ！！

そこからは地獄だった。思い出したくも無い地獄だった。思い出すだけでも体が癱のように震えてくる。

そんな地獄のような修行を続ける事により、俺はメキメキと実力をつけていった。

その中で俺は新しい力も手に入れ、気がついたら帝都守護役ヤタガラスからの神階の位階が従一位で恭二さんに次ぐ実力者として葛の葉一族からは一目おかれる存在になっていた。

(ちなみにキョウジさんは正一位の称号で？1の実力者なのは予断である。)

**悪魔使い依頼を受けるのこと(前書き)**

更新が大幅に遅れました。

リアルが忙しく時間が……。

この物語はかなり独自解釈やご都合主義が多分に入っております。

ご了承くださいませ。

## 悪魔使い依頼を受けるのこと

俺とヒトミは修行する事になったんだが、ヒトミの方も順調に修行をしているみたいだ。

（まあ、ヒトミの修行も後日語る日が来るだろう。）

俺はキョウジさんによりこの世界のしきたり、つまりは裏のルール・サマナーとしてのルールを教わりながら修行をつけていくことになった。

修行といっても、異界でひたすら悪魔と対峙して自分の力を知り、自分の限界を知ることだった。

俺はあの天海市の事件の中で限界と思うことを何回も超えてきたが、今回はその限界からさらに限界を超えたものだった……。

「あゝ、死ぬかと思った……」

「まっ死ななかつたのは？褒めてやろうかな？ほんの少しだが……」

「はあ。ほんの少しですか……」

俺は静かに銃を取り出した。

俺は静かに引き金を引いた。

パンパンパンッ……！

「うおおあああ！！あぶねえ！！」

「……………チツ」

（もう少しだったんだが……）

「殺す気か！！」

「いえ？修行で銃に異常が無いか調べただけですよ？」

「……………ほゝ、そうかそうか……」

「まだまだ、修行し足りないと考える。……………開け異界の門よ！！」

「え？」

いきなり浮遊感が生まれたと思ったら、以前と同じ異界への入り口が俺の足元に開いた。

「またかあああああ！！」

「まだまだ。修行が足りねえよ、焰！！特に精神力の修行のナ？」

……………閑話休題……………

何度もキョウジさんに異界に落とされながらも、合間合間にはしきたりやルールを覚える為に様々なところへ、顔を出し実地で覚えて言った。

この世界で生きていくには何よりも情報が必要だ、それは実生活の

中でも言える事だが、特にデビルサマナーは悪魔に関する情報は常に必要だ。その中でサマナーの召喚具での話だが、葛の葉一族のデビルサマナーは、封魔管と呼ばれるものを使用し悪魔を召喚するのが本来のスタンスであり、マダム銀子さんもこれらしいが僕とキヨウジさんは異端であるらしい。

まあそんなことはどうでもよく、最近ではヒトミと共に修行と言う名の実践もこなすようになってきた。

そんなある日、マダム銀子さんより最優先での依頼と言うことで話  
がきた。

「ごめんなさいね、いつも変な依頼ばかりで」

「気にしないで下さい。銀子さんには返せないほどの恩がありますし、なによりも俺の事を頼ってくれているのが嬉しいですよ」

「そう言ってくれると嬉しいわ」

そう言うと銀子さんはふわりとした笑顔を見せてくれた。

「で？依頼はどんな事です？」

「そうね、依頼者は関西呪術協会からの依頼よ」

「・・・もしかして詠春さんからですか？」

「そうよ、しかも極秘依頼よ」

「どうしたんですかね？まあ、事情はわかりませんが、依頼は受け

ますよ」

依頼を受けようとすると、脇にいたヒトミが聞いてきた。

「依頼を受けるのはいいんだけど……。焰まだこなしてない依頼もあつたでしょ？それはどうするの？」

「それなら問題はないわ、キョウジとレイに任せれば大丈夫よ？」

「でも、めんどくさい依頼も多いですよ？」

そんな依頼を考えるとキョウジさんが話しかけてきた。

「大丈夫だ、焰・ヒトミ、お前は気にしないでそっちに専念しろ」

「恭二さん……」

最近では恭二さんは当主としての自覚がでたのか、以前みたいなサボリ癖は鳴りを潜めて、仕事に専念するようになったのだが、たまに命の洗浄と言う名の逃亡をすることがあるらしい。

「まあ、帝都守護役ヤタガラスと葛の葉一族も一応は関西呪術協会に所属するんだ、葛の葉の名代として俺の代わりに行ってこい」

ちなみに、所属といっても暗部に属していて代々当主か数人の幹部しか知らないことである。

実はヤタガラスは宮内庁所属（天皇直属）のものであり事実上は関西呪術協会の方が下であるが、それを知らない人間も多い。

「取り敢えず詠春の所へ一度行ってこい、色々ややこしい話があ

りそうだからな」

「解りました。じゃあ早速明日にでも行ってきました」

~~~~~翌日~~~~~

俺は、早速京都に向かい関西呪術協会の本部である近衛詠春様の自宅へ来ていた。

「葛の葉一族所属、『神威焰』依頼の為に近衛詠春様に会いに来ました。お取り次ぎをお願いしたいのですが。」

「解りました。少々お待ちを」

しばらくすると、巫女服を着た女性が案内をしてくれた。

「こちらです、長は中でお待ちしています」

「わかりました、案内ありがとうございます」

部屋の中では、詠春さんがお茶をたてながら待っていた。

「わざわざ此方においでいただき大変申し訳ない。本来であれば此方が出向いてお願いしなくてはいけない立場なんですけど・・・」

「いえいえっ！！若輩者の私なんでそんなにかしこまらないでください」

「早速ですが本題に入りましょうか。先日、私の娘のこのかを狙う過激派が麻帆良学園で見つかりました。」

「過激派ですか？」

「そうです・・・」

詠春さんは言いにくそうに話してきた。

「お恥ずかしい話ですが、関西呪術協会は一枚岩ではないのです、表立っては一枚岩に見えるでしょうが、実際には西洋魔術師を怨み、あわよくばと考えているものたちも多いのです」

たしか詠春さんの娘さんは、魔力量が『極東』だったはずだが・・・。

「よって今回の依頼は、このかの護衛及びこのかを利用し関東魔術協会をつぶそうとしている過激派の排除です」

「・・・しかし、そうになると契約期間は」

「それに関しては、このかが高校へ進学するまでの間お願いしたいのです。今からだと約2年間です」

「2年ですか、また長い期間ですね・・・」

~~~~~閑話休題~~~~~

「ところで詠春さん、娘さんは、こちら側の事を知っているのですか？」

「娘はこちらの事は知りません。娘には普通の生活をしてもらいた

いのです」

「しかし、あれだけの魔力をもっていると狙われるしむしろ、魔力に当てられて死ぬかもしれませんよ？」

「そうかもしれませんが。しかしこのかには最低でも成人するまでは喋らないつもりです。バカな親と思うでしょうけれども。」

実際この依頼に関しては……。

このか嬢の護衛は俺だけではないだろうから、問題は無いだろうが。過激派の排除が問題だな……。

何処まで詠春さんは関西呪術協会をまとめているかは見当もつかないが……、大部分の人間は従っているが過激派といわれる人間はほんの一部だが、快く思っていない人間はかなりいそうだな……。

……まあ、なるようにしかならないか。

「解りました。依頼は受けましょう。しかしいくつか条件があります。1つ目はこちらの世界を知ったときには、詠春さんあなたがかならず、自ら説明と修行をつけると約束してください。2つ目は……でお願いいたします。」

「解りました。まっことかないませんね焔君には。」

「では、いつから麻帆良に行けばよいのですか？」

「なるべく早くの方が良いのですが……。」

「では、一週間後をお願いします。色々と用意と準備もありますし」

「ではあちらでの住まいは私の方で手配しときまじょう。」

「何か希望はありますか？」

「いつものようお願いします。」

「解りました。」

そういつと詠春さんは懐から、封筒を出してきた。

「では、つまらない親ばかりの意地で迷惑をかけてしまいましたが、よろしくお願いいたします。これはあちらでの滞在費などです。足りない分は請求してください。」

「わかりました。ありがたく頂戴いたします」

「ではまた……」

~~~~~翌日~~~~~

俺はヒトミと共にスピーキーズのトレーラーの中で今後のことを話していた。

「依頼は、このか嬢の護衛及び過激派排除だ、契約期間は約2年だ」

「ヒトミはどうする？」

「どうするって？行くに決まってるでしょ！！」

「そうか、着いてきてくれるのか、ありがたいな」

やはりヒトミは幼馴染だしきてくれるか。正直着てくれなかったらどつしよつと思ってた。

「そうよ！！私はおじさんとおばさんに焰のこと頼まれてるんだから！！一緒に行かないとダメなの！！」

「ははっ、そうだなランチ達も麻帆良に行くらしいからまた、皆で騒げるな！！」

ゾクッ！！

なぜか俺は寒気を感じた。それは目の前のヒトミからだが・・・。

「・・・・・・・・・・はっ？二人でイクノデハナイノ？」

「いやっアレだけでかい学園都市だから、色々大変だし！！ほらランチ達も乗り気でユウイチなんかは俺も行くうう！！とか言ってる？」

「それで行くことに？なったの？」

「そうです・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

なぜかヒトミは不機嫌そうで、納得外かなそうでブツブツ何かをつぶやいているが、決まってしまったものはしょうがないだろう。

「ヒトミ？久々のスプーキーズで動けるんだぜ？絶対楽しいぜ？」

「……はあああ」

「????????どした??」

「まつ良いわ、そこら辺が焰らしさなんだもん。しょうがないしよ  
うがない。」

「で?いつ行くの?」

「一週間後だな、住む場所は向こうに用意してあるから、心配はし  
なくて良いよ?」

「トレーラーはどつするの?」

「ランチが乗って向かってくれるらしい」

「そう、じゃあ一週間後にここで待ち合わせしたから一緒に行きま  
しょ?」

「そうだな、向こうについたら色々大変そうだから、なるべく一緒  
の行動が良いかもな」

「……それじゃあまたね。今日はこれで私帰るね?焰は?」

「すこしGUMPを調整していくからさき帰っていてくれ」

「了解!じゃあまた、夜にまた電話するわ」

「んっ了解だ、ではまた……」

~~~~~一週間後~~~~~

「ここが麻帆良か……。」

俺達は電車で麻帆良に来ていた。

「でけえな」

ある程度の情報は得ていたからそこまで驚かなかったが、実際見るとすごい一言に尽きる

学園都市でここまででかいには世界でもないのではないか？と思う。

……話がそれたな。

周りを見回してみると。おおきな木というか遠近法が狂ったとしか思えないような巨木があるが、あれが詠春さんがいつていた世界樹か……。

それよりも麻帆良についた瞬間妙な魔力？を常に感じている。と言うかこの麻帆良学園都市の全てが結界で覆われている。

認識阻害の結果だが、ここまで強いのは気持ちが悪いな……。  
なんというか、異界と同じような感じがする。

そんな状況分析をしていたが……。

「……フンッ」

「・・・はあ」

絶賛不機嫌中のヒトミのことを考えないようにしていただけなのだ。

まあ・・・、なにわともあれ二年間との短くて長い生活がここから始まるから。

幸先の良いスタートが切れることを祈るばかりだ。

**悪魔使い依頼を受けること（後書き）**

2、3日後には次話アゲタイとオモツテマスー

ガンバリマスー

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2156t/>

---

麻帆良学園と悪魔使い

2011年6月10日01時56分発行